

審査の結果の要旨

氏名 河野 桃子

本研究は、欧米で多くの支持者をもつ「シュタイナー教育」（ヴァルドルフ教育）の根幹をなすドルフ・シュタイナー自身の思想（とりわけ後期の思想）について、その特異な自己概念と認識概念に着目しつつ、先行研究とは異なる独自の解釈を示している。

本研究の全体構成は、先行研究を概観し本研究の課題設定を行い、研究方法を述べた序章、それに続く本論の4章、そして議論を総括しその含意を述べた終章である。

第1章では、前期シュタイナーが、後期の神秘主義的・二元論的思想と対立するようなM.シュティルナーの思想を高く評価していたことに着目しつつも、前期においては、シュティルナーに沿いつつ、理想的な倫理的状态（「世界自己」、すなわち「世界」と同じ広がりをもつ「私」）を静態的に記述するにとどまっているが、後期においては、この理想的な倫理的状态へと人々を導く具体的な方法としての教育（〈教育〉と表記）が語られている、ととらえ直し、両時期のシュタイナー思想の連続性を示している。

第2章では、シュタイナー後期思想における〈教育〉の組成と機能が描き出されている。すなわち、〈神話〉（認識可能性の外についての思考）が、人々の「想像力」を喚起するとともに、自分を「問い直す」自己反照を生みだし、その自己反照の繰りかえしが〈神話〉自体を徐々に明確化し、真の「認識の拡張」をもたらす、と論じられる。

第3章では、この〈神話〉による〈教育〉の働きが、「私」の変容として、詳細に論じられている。すなわち、日常的な「人格」から、日常性を脱し〈神話〉に向かう「個人」へ、さらに「世界自己」へ、という「自己」の深化（高次化）である。

第4章では、先述の想像力と自己反照の往還を踏まえつつ、〈神話〉のもたらす認識内容の変容を「認識の階梯」（通常感覚を段階的に超えていく認識の四階梯）によって分節している。すなわち、〈神話〉による「認識の拡張」に人々が取り組むなかで、認識内容が物質的なものから、最終的にもっとも高次なものへと変容する、と論じている。また、この変容は、後期においてはじめて把握された、とする。さらに「オイリュトミー療法」と呼ばれる教育実践に関わる実践者を対象に行ったインタビュー調査の記録に基づき、この「認識の拡張」を具体的にたどるとともに、その教師教育論的な意味を析出している。

終章では、シュタイナー教育の実践から後期思想を切り離すことについて、二つの問題を指摘している。第一は、この分離によって、〈神話〉的思考によって操作可能性と操作不可能性の「間」で子どもを「見る」という教育学的思考が失われかねないという問題である。第二は、この分離によって、最終的に目指されている理想的な人間像・社会像へのまなざし（「想像力」が向かうところ）が切り捨てられ、〈教育〉が本来目指していた「倫理的個人主義」の実現とは正反対の、閉じた思考が形成されかねないという問題である。

本研究は、いわゆる「シュタイナー教育」の根幹をなすシュタイナー自身の思想の、前期と後期をつなぐ基本構造を、通説を超えて明らかにするとともに、「世界自己」という超越論的自己概念の可能性、いいかえれば、自由と倫理を両立させる個人の存在様態を示し、また「想像力」と「問い直し」（自己反照）の往還・深化という認識概念の可能性、いいかえれば、〈神話〉（いわば、超越性への思考）に向かうベクトルのもつ教育学的重要性を示している意味で、オリジナルな学術的貢献が認められる。よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断された。